

AI時代だからこそ

先日、早稲田大学の巖淵守先生にお願いしていた「Rosewood」というアプリが届いた。最新のAI技術を活用して、カメラで人の身体部位を捉え、特定の部位の動きをオンオフ信号として取り出すことの出来るアプリである。体が動いてもその部位を自動追尾してくれ、3-4m離れたところに設置しても、薄暗くても、キャリブレーションすることなく確実に体の動きを捉えてくれる。ALSやSMAの人の微細な動きだけでなく不随意運動のある脳性麻痺の人の動きも看護や介護の邪魔をすることなくすぐに活用できそうである。私自身、40年以上も前から重度障害のある人の残存運動機能をさまざまなスイッチを用いて取り出そうと努力してきた。スイッチの選択、固定方法、複数のスイッチの組み合わせなど様々な努力をしてきたが、完璧なものは一度も作れたことがなかった。それがAI技術によって実現しつつある。夢のようなアプリである。

ただ、これまで行ってきたスイッチのフィッティング、失敗を繰り返しながら積み上げていった会話、そこで知った障害のある人の身体特性や暮らし。そんな時間は決して無駄ではなかったように思える。当事者の人にとっては簡単にスイッチングできることに越したことはないが、支援技術の専門家の人たちにとっては、このプロセスがブラックボックス化し、障害をリアルに理解する大切な学びの時間と知恵が失われていく危険性もある。さらに、部位を動かささえすればスイッチが入るので、重度重複障害の子どもにもすぐ使えそうですねという声を聞く。しかし、そこは慎重にならないと本人の意思を間違えて汲み取る可能性もある。AIは本人の意思かどうかまでは教えてくれない。AIを活用した技術は加速度的に増加していくと考えられているが、全てが自動化し、考えなくてもいい世界になっていくことに恐ろしさを感じる。

次年度の魔法のプロジェクトのテーマは「インクルーシブ教育」。テクノロジーが能力を補償し、障害のある子も同じスタートラインに立つことが出来れば、インクルーシブ教育はこれまでよりも容易になるとも考えられる。その一方で、異なる能力の人が共に学ぶ中で面白さや難しさを感じることもこそがインクルーシブ教育の本質であると捉えることも出来る、AIのような先端テクノロジーは今後も我々の想像以上の価値観を人間にもたらすに違いない。その時もテクノロジーではなく人を見つめ、心を柔軟にして教育とは何かを考え続けていければと思う。